

| | | | |
|---------|--------------------------------------|-------------------|---------|
| 氏名(国籍) | ちえ 崔 | すん ひ 丞 希 (韓 国) | |
| 学位の種類 | 博 士 (芸 術 学) | | |
| 学位記番号 | 博 甲 第 5137 号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成 21 年 3 月 25 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | バルテュスの少女像の成立と展開 - 光に対する問題意識を巡って - | | |
| 主 査 | 筑波大学教授 | 博士 (芸術学) | 齊 藤 泰 嘉 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 博士 (芸術学) | 岡 崎 昭 夫 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | | 玉 川 信 一 |
| 副 査 | 筑波大学准教授 | 博士 (芸術学) | 石 崎 和 宏 |

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本論は、バルテュスの少女像が独自の画題として定着し、展開していく過程において、画家の光に対する問題意識がどのような形で画面に現れたかを考察し、著者の制作にどのような形で反映されたかを検証するものである。バルテュスの先行研究は、「伝記的事実の探求」「過去の巨匠との比較考察」「作品の文学的・哲学的読解」に偏り、画家が終始一貫して固執した少女像に現れる光の重要性と画面で展開されるその造形的な働きについては、あまり語られてこなかった。ここでは、バルテュス作品における光の特徴と効果について、最初に画面構成上の重要な要素として光を規定すること、そして作品の上で光に対する問題意識が作用していることを検証し、光はその性質を活用することで大きな表現効果を得られる重要な造形要素であることを再確認すること、最後に作品分析を通じて、理論化されていなかった光の表現法を整理し、その有効な表現法を制作実践で活用することの3点を目的として考察する。

(対象と方法)

第1章では、画家の生涯を居住地の変化による6つの時代に区分し、各時代の特色について検討する。少女像が独自のものとして成立してからどのような構成要素で晩年まで展開していくのかを形式分類することで、生涯で制作された少女像の全体像を把握し、初期から晩年にかけて共通する構成要素が画面に反復して用いられており、画風の変化そのものには大きな影響を及ぼしていないという著者の見解を立証する。

第2章で1期～3期、第3章で4期～6期の作品を個別的に分析する。作品の成立背景、全体的構成要素、作品上の陰影あるいは投影の方向や面積に基づいて光源の方向や強度を検討する。最終的に構図・明暗・形態・色彩における光の働きを吟味するという手順をとることによって、画家が光のどのような効果を意図して画面を構築したか、光の視覚的効果に対する問題意識を明確にする。

第4章でバルテュスの作品の分析を通じて明らかになった光の有効な表現法を著者自身の作品にどのように取り込み展開させて行ったかを検証し、結章で今後の展望を提示する。

(結果)

1章3節で行った形式分類は、登場人物のポーズによるもの、着衣状態によるもの、副次的モチーフによるもの、状況設定によるもので行った。これらを分類することで、挿絵や古典絵画からの引用のポーズは、はじめの段階では原型との類似性が強いが徐々に独自の解釈が加えられ、変形されてバルテュス独自のものとして完成すること。共通するモチーフに従って図版を時代順に並べた結果、同じ項目で違う年代に描かれた諸作品が連作のように展開すること。またそれらは同じ対象を描きながらも構図や形態や色彩などに変化を与えながら展開していることが図表によって概観できた。

2章3章で光の特徴と効果を分析し、それぞれの光の扱いに名称を与えることによって作品の時代区分と表現の展開を確認していく。複数の直接光、正面一側方光、側面光、水平方向の斜光、側方光、交差光、直接光、垂直方向の斜光、粒子光、散光、異なる集中度の光、複数の直接光、正面光、異なる光量、入射光に分類される光の表現は、多様性に富み、複雑に組み合わせられている。バルテュスの光は一つの特徴を持ったものというより、多角的視点で捉えられており、その問題意識が変化することで画面の表情も変化するということ、すなわち光は彼の画面を支配する重要な要素であるということが明確になった。

(考察)

2003年から2008年までの6年間に描かれた著者の作品の展開は、光に対する意識の変化と直結した表現法の展開でもあった。そこでは日常的イメージを基調としながらもそれらを非現実的な状況に置き換えることで制作の動機付けとしていた時期から、バルテュスの2期や3期の光の解釈が取り入れられ、主たる光源の設定と画面全体の統一感が重視される時期を経て、人体のフォルムを明確に捉えるとともに光の物質感の関係からマチエールに対する関心と効果が探求される時期にさしかかっている。この実践の結果、運動感の表現、有機的な統一感のある画面の獲得、マチエールによる新たな展開という成果を得ることができたとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

著者の言うように、バルテュス作品における光の解釈については、先行研究においていくつかの言及はあるものの、それらは作品の文学的・哲学的読解に属するものが多く、造形的視点からの研究はほとんどされていないようである。その意味からも、本論はバルテュス研究の新しい視点を提供するものであり、評価できるものである。1章3節の作品に対する形式分類は図像によって綿密に行われており、著者の見解を裏付けるものである。2章3章の光に対する問題意識と効果についての考察は個別の作品に対して詳細に行われており、バルテュスの光の表現法の変化としてまとめられた図表は分かりやすく、著者の主張を裏付けるものとして実証的である。さらにこの研究が、著者の表現へ反映されていく過程が示されることで、バルテュス研究の成果がより具体的に示されており、今後の展開へ繋がるのが期待できる。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。